

経路積分 (2) : 量子力学の Green 関数

Brown 運動の数学, 確率過程・確率解析 (6)

緒方秀教

電気通信大学

November 19, 2021

はじめに

今回は物理よりの話になります。

- 前回：拡散型方程式・Schrödinger 方程式（量子力学）の Green 関数に対する経路積分表示。
- 今回：量子力学の Green 関数の経路積分について考える。
- 量子力学，Schrödinger 方程式の Green 関数（伝搬関数）。

$$\sum_{\text{path}} C \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\text{path})]\right), \quad S[x(\cdot)] : \text{ひとつの経路に沿っての作用.}$$

なぜ，exp の肩に「作用」が来るのか？

- Green 関数の具体的計算。
- Green 関数の物理的意味（「伝搬関数」以外に）。
量子的固有状態についての情報を抱えている（固有エネルギー，固有関数）。

今回の内容

- ① はじめに
- ② 経路積分の解釈
- ③ 経路積分の計算
- ④ Green 関数の物理的意味
- ⑤ まとめ
- ⑥ 補遺：作用関数の微分

目次

- ① はじめに
- ② 経路積分の解釈
- ③ 経路積分の計算
- ④ Green 関数の物理的意味
- ⑤ まとめ
- ⑥ 補遺：作用関数の微分

経路積分の解釈

量子力学：ミクロな世界（原子，分子，…）をつかさどる物理学。

- すべてのモノは物質，波動の二側面をもつ。
- 波動関数 $\psi(t, x)$ ：波動の側面を記述。
- $|\psi(t, x)|^2$ は確率密度。
 $|\psi(t, x)|^2 dx$ ：時刻 t に位置 $x \sim x + dx$ に存在する確率。

経路積分の解釈

量子力学：ミクロな世界（原子，分子，…）をつかさどる物理学。

- すべてのモノは物質，波動の二側面をもつ。
- 波動関数 $\psi(t, x)$ ：波動の側面を記述。
- $|\psi(t, x)|^2$ は確率密度。
 $|\psi(t, x)|^2 dx$ ：時刻 t に位置 $x \sim x + dx$ に存在する確率。

Schrödinger 方程式：波動関数が従う基礎方程式。

$$i\hbar \frac{\partial \psi(t, x)}{\partial t} = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{\partial^2 \psi(t, x)}{\partial x^2} + V(t, x)\psi(t, x),$$

m 質量, $V(t, x)$ ポテンシャル, $\hbar = \frac{h}{2\pi}$, $h = 6.62607015 \times 10^{-34} \text{m}^2\text{kg/s}$ (Planck 定数)。

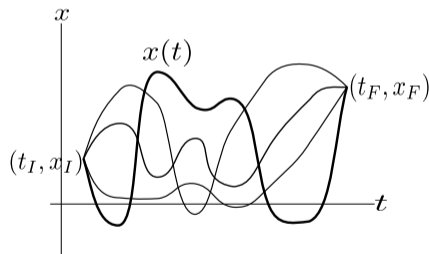
Green 関数 (伝搬関数) $\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I)$ ：波動の伝播の様子を与える。

$$\psi(t_F, x_F) = \int_{-\infty}^{\infty} dx_I \mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) \psi(t_I, x_I).$$

経路積分の解釈

Green 関数の経路積分表示

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp \left(\frac{i}{\hbar} \int_{t_I}^{t_F} dt \left[\frac{m}{2} \left(\frac{dx(t)}{dt} \right)^2 - V(t, x) \right] \right).$$

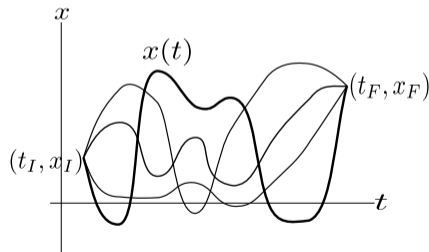


2点 $(t_I, x_I), (t_F, x_F)$ を結ぶすべての経路 $x(t)$ についての和.

経路積分の解釈

Green 関数の経路積分表示

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp \left(\underbrace{\frac{i}{\hbar} \int_{t_I}^{t_F} dt \left[\frac{m}{2} \left(\frac{dx(t)}{dt} \right)^2 - V(t, x) \right]}_{\text{作用}} \right).$$



2 点 $(t_I, x_I), (t_F, x_F)$ を結ぶすべての経路 $x(t)$ についての和.

経路積分の解釈

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right),$$

$S[x(\cdot)]$ は $(t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ を結ぶひとつの経路 $x(t)$ に沿っての**作用**

$$S[x(\cdot)] := \int_{t_I}^{t_F} dt L(t, x(t), \dot{x}(t)), \quad L(t, x(t), \dot{x}(t)) := \frac{m}{2} \dot{x}(t)^2 - V(t, x(t)) \quad \text{Lagrangian.}$$

- 経路 $x(t)$ は波動関数 $\exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right)$ を与える。→それを集めたのが Green 関数（伝搬関数）。
- では、**exp の肩に作用 S が来るのはなぜか？**

経路積分の解釈

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right),$$

$S[x(\cdot)]$ は $(t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ を結ぶひとつの経路 $x(t)$ に沿っての**作用**

$$S[x(\cdot)] := \int_{t_I}^{t_F} dt L(t, x(t), \dot{x}(t)), \quad L(t, x(t), \dot{x}(t)) := \frac{m}{2} \dot{x}(t)^2 - V(t, x(t)) \quad \text{Lagrangian.}$$

- 経路 $x(t)$ は波動関数 $\exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right)$ を与える。→それを集めたのが Green 関数（伝搬関数）。

- では、**exp の肩に作用 S が来るのはなぜか？**

（結論） $\exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right)$ は経路 $x(t)$ に沿って微小な「平面波」をつなぎ合わせたものである。

これをこれから、解析力学から始めて説明していく。

経路積分の解釈

まず，解析力学から

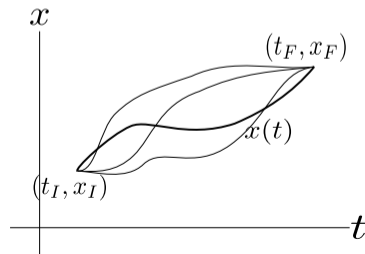
Hamilton の原理（最小作用の原理）：古典力学の第一原理

時間 $t = t_I \sim t_F$ における質点の軌道は，始点 $x(t_I) = x_I$ ，終点 $x(t_F) = x_F$ を固定した上で

$$\text{作用 } S[x(\cdot)] = \int_{t_I}^{t_F} dt L(t, x(t), \dot{x}(t)), \quad L(t, x(t), \dot{x}(t)) = \frac{m}{2} \dot{x}(t)^2 - V(t, x) \quad \text{Lagrangian}$$

を停留にするようなものをとる。

$$\begin{aligned} \delta S[x] &= S[x + \delta x] - S[x] = 0 \\ &\rightarrow \text{質点の軌道 } x(t). \end{aligned}$$



経路積分の解釈

まず、解析力学から Hamilton の原理の確認.

- $x(t)$: 質点の実際の軌道
- $x(t) + \delta x(t)$: 軌道 $x(t)$ から微小にずれた軌道 ($\delta x(t_I) = \delta x(t_F) = 0$)

$$\begin{aligned}
 \delta S &= S[x + \delta x] - S[x] \\
 &= \int_{t_I}^{t_F} dt \left\{ L(t, x + \delta x, \dot{x} + \delta \dot{x}) - L(t, x, \dot{x}) \right\} \\
 &= \int_{t_I}^{t_F} dt \left\{ \delta x \frac{\partial L}{\partial x} + \delta \dot{x} \frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right\} \quad (\text{第 2 項に部分積分を施して}) \\
 &= \underbrace{\left[\delta x \frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right]}_{0 \ (\because \delta x(t_I) = \delta x(t_F) = 0)} + \int_{t_I}^{t_F} dt \delta x \left\{ \frac{\partial L}{\partial x} - \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right) \right\} = 0.
 \end{aligned}$$

経路積分の解釈

まず、解析力学から Hamilton の原理の確認.

- $x(t)$: 質点の実際の軌道
- $x(t) + \delta x(t)$: 軌道 $x(t)$ から微小にずれた軌道 ($\delta x(t_I) = \delta x(t_F) = 0$)

$$\int_{t_I}^{t_F} dt \delta x \left\{ \frac{\partial L}{\partial x} - \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right) \right\} = 0 \quad \text{for } \forall \delta x(t).$$

$$\therefore \frac{\partial L}{\partial x} - \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right) = 0 \quad \text{Lagrange 運動方程式.}$$

Lagrange 運動方程式に $L = \frac{m}{2} \dot{x}^2 - V(t, x)$ を代入すれば, Newton 運動方程式

$$m \frac{d^2 x}{dt^2} = - \frac{\partial V(t, x)}{\partial x}$$

が得られる.

経路積分の解釈

作用 S の意味 作用 S を終点 $(t, x) = (t_F, x_F)$ の関数とみなす (始点 (t_I, x_I) は固定) :

$$S(t, x) := S[x_\bullet(\cdot)] = \int_{t_I}^t d\tau L(\tau, x_\bullet(\tau), \dot{x}_\bullet(\tau)),$$

$x_\bullet(\tau) : (t_I, x_I) \sim (t, x)$ を結ぶ質点の実際の軌道 (運動方程式の解).

このとき、次がわかる

$$\text{運動量 } p = \frac{\partial S}{\partial x}, \quad \text{エネルギー } E = -\frac{\partial S}{\partial t}.$$

(ざっくりとした証明)

$$S = \int_{t_I}^{t_F} dt L = \int_{t_I}^{t_F} dt (p\dot{x} - E) \quad \therefore \quad dS = p dx_F - E dt_F.$$

ちゃんとした証明はスライド「補遺」に記します (概要欄の URL に PC スライドを置いておきます) .

経路積分の解釈

作用 S の意味 作用 S を終点 $(t, x) = (t_F, x_F)$ の関数とみなす (始点 (t_I, x_I) は固定) :

$$S(t, x) := S[x_\bullet(\cdot)] = \int_{t_I}^t d\tau L(\tau, x_\bullet(\tau), \dot{x}_\bullet(\tau)),$$

$x_\bullet(\tau) : (t_I, x_I) \sim (t, x)$ を結ぶ質点の実際の軌道 (運動方程式の解).

このとき、次がわかる

$$\text{運動量 } p = \frac{\partial S}{\partial x}, \quad \text{エネルギー } E = -\frac{\partial S}{\partial t}.$$

時空間内を微小変位 $(t, x) \rightarrow (t + \Delta t, x + \Delta x)$ したときの作用の微小変化

$$\Delta S = p\Delta x - E\Delta t.$$

経路積分の解釈

量子力学へ 前期量子論 (19 世紀後半～20 世紀はじめ)

- 古典物理学では説明できない物理現象 (黒体輻射, 光電効果, etc.) .
- すべてのものは粒子と波動の二面性を持つ.

エネルギー $E = h\nu = \hbar\omega$ (ν : 振動数, $\omega = 2\pi\nu$: 角振動数),

運動量 $p = \frac{h}{\lambda} = \hbar k$ (λ : 波長, $k = 2\pi/\lambda$: 波数).

経路積分の解釈

量子力学へ 前期量子論 (19 世紀後半～20 世紀はじめ)

- 古典物理学では説明できない物理現象 (黒体輻射, 光電効果, etc.) .
- すべてのものは粒子と波動の二面性を持つ.

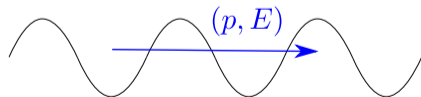
エネルギー $E = h\nu = \hbar\omega$ (ν : 振動数, $\omega = 2\pi\nu$: 角振動数),

運動量 $p = \frac{h}{\lambda} = \hbar k$ (λ : 波長, $k = 2\pi/\lambda$: 波数).

自由粒子 (エネルギー, 運動量一定) = 平面波.

波動関数は平面波.

$$\begin{aligned}\psi(t, x) &= C \exp[i(kx - \omega t)] \\ &= C \exp\left[\frac{i}{\hbar}(px - Et)\right].\end{aligned}$$



経路積分の解釈

量子力学へ 一般の粒子の波動関数は？

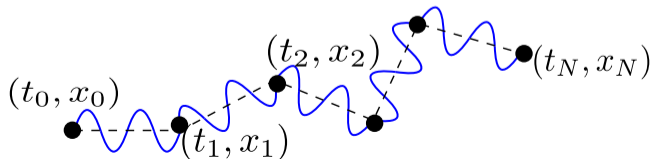
- まず、粒子は時空間内のひとつの経路 $x(t)$ 上を動くとする。
- 経路 $x(t)$ を細分する：

$$(t_0, x_0) \sim (t_1, x_1) \sim (t_2, x_2) \sim \cdots \sim (t_N, x_N).$$

- 各微小区間 $(t_k, x_k) \sim (t_{k+1}, x_{k+1})$ で波動関数を平面波で近似。

$$\exp \left[\frac{i}{\hbar} (p_k x - E_k t) \right].$$

- これらの微小平面波をつなぎ合わせたものが、経路 $x(t)$ に沿う波動関数である。

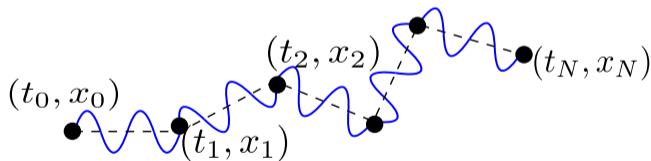


経路積分の解釈

量子力学へ 一般の粒子の波動関数は？

経路 $x(t)$ に沿う波動関数．終点 $(t_F, x_F) = (t_N, x_N)$ における値は，

$$\exp\left(\frac{i}{\hbar}(p_0\Delta x_0 - E_0\Delta t_0)\right) \exp\left(\frac{i}{\hbar}(p_1\Delta x_1 - E_1\Delta t_1)\right) \cdots \exp\left(\frac{i}{\hbar}(p_{N-1}\Delta x_{N-1} - E_{N-1}\Delta t_{N-1})\right).$$

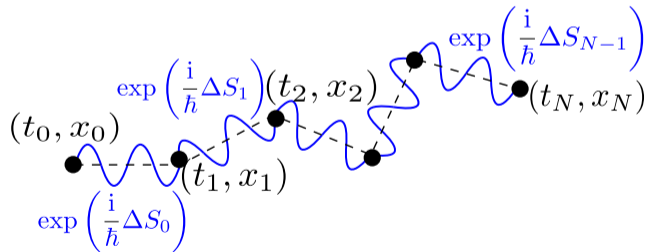


経路積分の解釈

量子力学へ 一般の粒子の波動関数は？

経路 $x(t)$ に沿う波動関数．終点 $(t_F, x_F) = (t_N, x_N)$ における値は， $\Delta S = p\Delta x - E\Delta t$ を思い出すと

$$\exp\left(\frac{i}{\hbar}\Delta S_0\right) \exp\left(\frac{i}{\hbar}\Delta S_1\right) \cdots \exp\left(\frac{i}{\hbar}\Delta S_{N-1}\right).$$

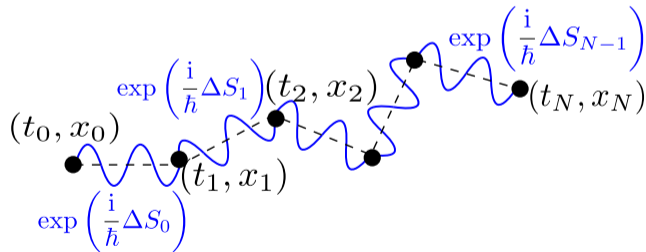


経路積分の解釈

量子力学へ 一般の粒子の波動関数は？

経路 $x(t)$ に沿う波動関数．終点 $(t_F, x_F) = (t_N, x_N)$ における値は， $\Delta S = p\Delta x - E\Delta t$ を思い出すと

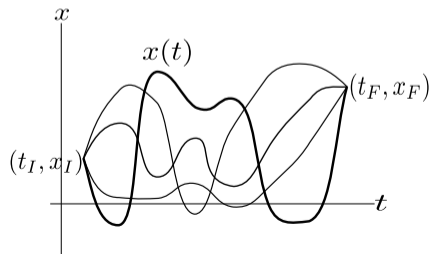
$$\exp\left(\frac{i}{\hbar}(\Delta S_0 + \Delta S_1 + \cdots + \Delta S_{N-1})\right) = \exp\left(\frac{i}{\hbar}S[x(\cdot)]\right).$$



経路積分の解釈

量子力学へ 一本の経路 $x(t)$ がつくる波動関数 $\exp\left(\frac{i}{\hbar}S[x(\cdot)]\right)$ を, $(t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ をつなぐすべての経路 $x(t)$ について和を取ったものが Green 関数 $\mathcal{G}(t_F, x_F|t_I, x_I)$ を与える.

$$\begin{aligned}\mathcal{G}(t_F, x_F|t_I, x_I) &= \sum_{\text{paths}} C \exp\left(\frac{i}{\hbar}S[x(\cdot)]\right) \\ &= \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp\left(\frac{i}{\hbar}S[x(\cdot)]\right).\end{aligned}$$



経路積分の解釈

量子力学へ 古典力学的極限 ($\hbar \rightarrow 0$)

$x_1(t) : \delta S[x_1] \neq 0$ なる経路.

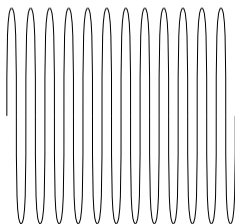
$x_1(t)$ 近傍の経路の経路積分への寄与を考える.

$$\int_{\text{neighborhood of } x_1} \mathcal{D}x(\cdot) \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x]\right) \simeq \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x_1]\right) \underbrace{\int \mathcal{D}(\delta x) \exp\left(\frac{i}{\hbar} \underbrace{\delta S}_{\neq 0}\right)}_{(1)} = 0.$$

(1) の \exp の位相は, $\hbar \approx 0$ より非常に大きい.

(1) は激しく振動する波動の重ね合わせなので消える.

(参考) Riemann-Lebesgue の定理 (Fourier 解析).



経路積分の解釈

量子力学へ 古典力学的極限 ($\hbar \rightarrow 0$)

$x_{cl}(t) : \delta S[x_{cl}] = 0$ なる経路, i.e., 古典的軌道 (古典力学の運動方程式の解) .

(注意) 古典的運動方程式 $\Leftrightarrow \delta S = 0$.

$x_{cl}(t)$ 近傍の経路の経路積分への寄与. $S[x] = S[x_{cl}] +$ (高次の微小量) より

$$\int_{\text{neighborhood of } x_{cl}} \mathcal{D}x(\cdot) \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x]\right) \simeq \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x_{cl}]\right) \neq 0.$$

古典力学的極限 $\hbar \rightarrow 0$

古典的軌道 $x_{cl}(t)$ 近傍の軌道のみが Green 関数の経路積分に寄与する.

$x(t) \simeq x_{cl}(t)$ に沿った波動関数 $\exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right)$ のみ Green 関数 $\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I)$ に残る.

経路積分の解釈

まとめ Green 関数の経路積分表示.

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right) = \sum_{\text{path}} C \exp\left(\frac{i}{\hbar} S[\text{path}]\right).$$

- $(t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ を結ぶすべての経路 $x(t)$ に沿う波動関数の和.
- 一つの経路 $x(t)$ に沿う波動関数は、経路を細分して各微小区間を平面波で近似して、それらをつなぎ合わせる. その結果が

$$\exp\left(\frac{i}{\hbar} S[x(\cdot)]\right)$$

である.

目次

- ① はじめに
- ② 経路積分の解釈
- ③ 経路積分の計算**
- ④ Green 関数の物理的意味
- ⑤ まとめ
- ⑥ 補遺：作用関数の微分

経路積分の計算

これから、自由粒子、調和振動子に対して Green 関数を具体的に計算する。

Green 関数の経路積分表示 (定義)

$$\begin{aligned} \mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) &= \int_{x(t_I)=x_I}^{x(t_F)=x_F} \mathcal{D}x(\cdot) \exp \left(\frac{i}{\hbar} \int_{t_I}^{t_F} dt \left[\frac{m}{2} \left(\frac{dx(t)}{dt} \right)^2 - V(t, x) \right] \right) \\ &:= \lim_{N \rightarrow \infty} \left(\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{N/2} \prod_{k=1}^{N-1} \int_{-\infty}^{\infty} dx_k \exp \left(\frac{i}{\hbar} \sum_{k=0}^{N-1} \Delta t \left[\frac{m}{2} \left(\frac{\Delta x_k}{\Delta t} \right)^2 - V(t_k, x_k) \right] \right), \end{aligned}$$

時間、空間のきざみ

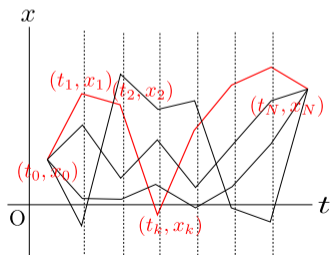
$$\begin{aligned} t_I = t_0 < t_1 < \cdots < t_N = t_F, \quad t_k = t_I + k\Delta t \quad \left(k = 0, 1, \dots, N-1; \Delta t = \frac{t_F - t_I}{N} \right), \\ x_k = x(t_k) \quad (k = 0, 1, \dots, N), \\ \Delta x_k = x_{k+1} - x_k \quad (k = 0, 1, \dots, N). \end{aligned}$$

経路積分の計算

これから、自由粒子、調和振動子に対して Green 関数を具体的に計算する。

Green 関数の経路積分表示 (定義)

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \lim_{N \rightarrow \infty} \left(\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{N/2} \prod_{k=1}^{N-1} \int_{-\infty}^{\infty} dx_k \exp \left(\frac{i}{\hbar} \sum_{k=1}^{N-1} \Delta t \left[\frac{m}{2} \left(\frac{\Delta x_k}{\Delta t} \right)^2 - V(t_k, x_k) \right] \right),$$



経路積分は

- 多重積分で
- 次元 $\rightarrow \infty$ としたもの。

経路積分の計算：自由粒子

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \lim_{N \rightarrow \infty} \left(\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{N/2} \left(\prod_{k=1}^{N-1} \int_{-\infty}^{\infty} dt_k \right) \exp \left(\frac{i}{\hbar} \sum_{k=0}^{N-1} \Delta t \left(\frac{x_{k+1} - x_k}{\Delta t} \right)^2 \right).$$

次の公式を用いて x_1, x_2, \dots, x_{N-1} の順に積分を実行する.

$$\int_{-\infty}^{\infty} dy \exp \left(-\frac{(x-y)^2}{a} \right) \exp \left(-\frac{(y-z)^2}{b} \right) = \sqrt{\frac{\pi ab}{a+b}} \exp \left(-\frac{(x-z)^2}{a+b} \right) \quad (\operatorname{Re} a, \operatorname{Re} b \geq 0).$$

経路積分の計算：自由粒子

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \lim_{N \rightarrow \infty} \left(\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{N/2} \left(\prod_{k=1}^{N-1} \int_{-\infty}^{\infty} dt_k \right) \exp \left(\frac{i}{\hbar} \sum_{k=0}^{N-1} \Delta t \left(\frac{x_{k+1} - x_k}{\Delta t} \right)^2 \right).$$

次の公式を用いて x_1, x_2, \dots, x_{N-1} の順に積分を実行する.

$$\int_{-\infty}^{\infty} dy \exp \left(-\frac{(x-y)^2}{a} \right) \exp \left(-\frac{(y-z)^2}{b} \right) = \sqrt{\frac{\pi ab}{a+b}} \exp \left(-\frac{(x-z)^2}{a+b} \right) \quad (\operatorname{Re} a, \operatorname{Re} b \geq 0).$$

自由粒子に対する Green 関数

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \sqrt{\frac{m}{2\pi i \hbar (t_F - t_I)}} \exp \left(\frac{i}{\hbar} \frac{m(x_F - x_I)^2}{2(t_F - t_I)} \right).$$

経路積分の計算：自由粒子

Green 関数を用いて波動関数の時間発展を計算する。

(例)

$$\psi(t=0, x) = \frac{1}{(\pi a^2)^{1/4}} \exp\left(-\frac{x^2}{2a^2}\right) \quad (a > 0 : \text{const.}).$$

$$\psi(t, x) = \int_{-\infty}^{\infty} dy \mathcal{G}(t, x|0, y) \psi(t=0, y), \quad \mathcal{G}(t, x|0, y) = \sqrt{\frac{m}{2\pi i \hbar t}} \exp\left(\frac{im(x-y)^2}{2\hbar t}\right).$$

前頁の公式を用いて,

$$\psi(t, x) = \sqrt{\frac{ma/\sqrt{\pi}}{ma^2 + i\hbar t}} \exp\left(-\frac{mx^2}{2(ma^2 + i\hbar t)}\right).$$

経路積分の計算：自由粒子

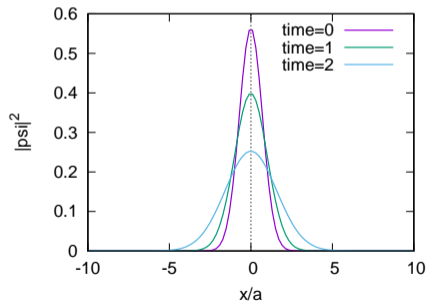
確率密度.

$$|\psi(t, x)|^2 = \sqrt{\frac{(ma)^2/\pi}{(ma^2)^2 + (\hbar t)^2}} \exp\left(-\frac{(max)^2}{(ma^2)^2 + (\hbar t)^2}\right).$$

時間経過とともに裾野が広がっていく.

確率密度 $|\psi(t, x)|^2$ のグラフ.

- 縦軸： $|\psi(t, x)|^2$.
- 横軸： x/a .
- $\text{time} = \hbar t / (ma^2)$.



経路積分の計算：調和振動子

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \lim_{N \rightarrow \infty} \left(\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{N/2} \int_{\mathbb{R}^{N-1}} d^{N-1} \mathbf{x} \exp \left(\frac{i}{\hbar} S_N(\mathbf{x}) \right),$$

$$S_N(\mathbf{x}) = S_N(x_1, \dots, x_{N-1}) = \sum_{k=0}^{N-1} \Delta t \left[\frac{m}{2} \left(\frac{\Delta x_k}{\Delta t} \right)^2 - \frac{m\omega^2}{2} x_k^2 \right].$$

$\nabla S_N(\mathbf{x}_{cl}) = 0$ なる $\mathbf{x}_{cl} = (x_1^{cl}, \dots, x_{N-1}^{cl})$ をとると,

$$S_N(\mathbf{x}) = \underbrace{S_N(\mathbf{x}_{cl})}_{(1)} + \underbrace{\frac{1}{2} \sum_{k,l=1}^{N-1} \frac{\partial^2 S_N}{\partial x_k \partial x_l} \Big|_{\mathbf{x}_{cl}} (x_k - x_k^{cl})(x_l - x_l^{cl})}_{(2)}.$$

$S(\mathbf{x})$ は二次関数なので、右辺の展開は厳密に成り立つ。

右辺第 1 項、第 2 項の寄与をそれぞれ計算する。

経路積分の計算：調和振動子

第 1 項の寄与 $\mathbf{x}_{cl} = (x_1^{cl}, \dots, x_{N-1}^{cl})$ は次を満たす.

$$\nabla S_N(\mathbf{x}_{cl}) = 0, \quad \text{i.e.,} \quad \frac{x_{k+1}^{cl} - 2x_k^{cl} + x_{k-1}^{cl}}{\Delta t^2} + \omega^2 x_k^{cl} = 0.$$

$\Delta t \rightarrow 0$ ($N \rightarrow \infty$) $\Rightarrow x_{cl}(t) := \lim_{N \rightarrow \infty} x_k$: 古典力学的調和振動子.

$$\frac{d^2 x_{cl}}{dt^2} + \omega^2 x_{cl} = 0, \quad x_{cl}(t_I) = x_I, \quad x_{cl}(t_F) = x_F,$$

Hamilton の原理 (最小作用の原理, $\nabla S_N(\mathbf{x}_{cl}) = 0$ に対応)

$$\delta S[x_{cl}] = 0, \quad \text{where} \quad S[x] := \int_{t_I}^{t_F} dt \left[\frac{m}{2} \left(\frac{dx}{dt} \right)^2 - \frac{m\omega^2}{2} x^2 \right] \quad \text{作用.}$$

経路積分の計算：調和振動子

第 1 項の寄与 古典力学的調和振動子 $x_{cl}(t)$ の具体形.

$$x_{cl}(t) = \frac{1}{\sin \omega(t_F - t_I)} [x_I \sin[\omega(t_F - t)] + x_F \sin[\omega(t - t_I)]],$$

古典力学的作用

$$S_{cl} := S[x_{cl}(\cdot)] = \frac{\omega}{\sin \omega T} [(x_I^2 + x_F^2) \cos \omega T - 2x_I x_F] \quad (T = t_F - t_I).$$

経路積分の計算：調和振動子

第 1 項の寄与 古典力学的調和振動子 $x_{cl}(t)$ の具体形.

$$x_{cl}(t) = \frac{1}{\sin \omega(t_F - t_I)} [x_I \sin[\omega(t_F - t)] + x_F \sin[\omega(t - t_I)]],$$

古典力学的作用

$$S_{cl} := S[x_{cl}(\cdot)] = \frac{\omega}{\sin \omega T} [(x_I^2 + x_F^2) \cos \omega T - 2x_I x_F] \quad (T = t_F - t_I).$$

* $S_{cl} = S[x_{cl}]$ は次のように計算するとラク.

$$\begin{aligned} S_{cl} &= \int_{t_I}^{t_F} dt \left[\frac{m}{2} \left(\frac{dx_{cl}}{dt} \right)^2 - \frac{m\omega^2}{2} (x_{cl})^2 \right] \quad (\text{部分積分を用いて}) \\ &= \frac{m}{2} \left[x_{cl} \frac{dx_{cl}}{dt} \right]_{t=t_I}^{t_F} - \frac{m}{2} \int_{t_I}^{t_F} dt x_{cl} \underbrace{\left[\frac{d^2 x_{cl}}{dt^2} + \omega^2 x_{cl} \right]}_0 = \dots \end{aligned}$$

経路積分の計算：調和振動子

第2項の寄与 二次の項： $S_N(x)$ の二階微分を計算すると、次のように表される。

$$\frac{1}{2} \sum_{k,l=1}^{N-1} \left. \frac{\partial^2 S_N}{\partial x_k \partial x_l} \right|_{\mathbf{x}_{cl}} (x_k - x_k^{cl})(x_l - x_l^{cl}) = \frac{m}{2\Delta t} (\mathbf{x} - \mathbf{x}_{cl})^T \mathbf{M}_N (\mathbf{x} - \mathbf{x}_{cl}),$$

where

$$\mathbf{M}_N = \begin{bmatrix} 2 - \omega^2 \Delta t & -1 & & & \\ -1 & 2 - \omega^2 \Delta t & -1 & & \\ & & \ddots & \ddots & \ddots \\ & & & -1 & 2 - \omega^2 \Delta t \end{bmatrix}.$$

経路積分の計算：調和振動子

$$\begin{aligned}
 & \mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) \\
 &= S_{cl} \lim_{N \rightarrow \infty} \left(\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{N/2} \exp \left(\frac{im}{2\hbar \Delta t} \int_{\mathbb{R}^{N-1}} d^{N-1} \mathbf{x} (\mathbf{x} - \mathbf{x}_{cl})^T \mathbf{M}_N (\mathbf{x} - \mathbf{x}_{cl}) \right) \\
 &= S_{cl} \lim_{N \rightarrow \infty} \sqrt{\frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \cdot \frac{1}{\det \mathbf{M}_N}}.
 \end{aligned}$$

公式（線形代数の練習問題）

$$\int_{\mathbb{R}^N} d^N \mathbf{x} \exp \left(\frac{i}{2} \mathbf{x}^T \mathbf{M} \mathbf{x} \right) = \sqrt{\frac{(2\pi i)^N}{\det \mathbf{M}}}.$$

$\det \mathbf{M}_N$ を計算しなければならない。

経路積分の計算：調和振動子

$$\begin{aligned}
 M_n &:= \det M_N \\
 &= \begin{vmatrix}
 2 - \omega^2 \Delta t & -1 & & & \\
 -1 & 2 - \omega^2 \Delta t & -1 & & \\
 & & \ddots & \ddots & \ddots \\
 & & & -1 & 2 - \omega^2 \Delta t
 \end{vmatrix} \quad (n = N - 1).
 \end{aligned}$$

第一行について余因子展開することにより,

$$M_n = (2 - \omega^2 \Delta t)M_{n-1} - M_{n-2},$$

この差分方程式の一般解は

$$M_n = C_1 \alpha_+^n + C_2 \alpha_-^n \quad (C_1, C_2 : \text{const.}).$$

ここで, α_{\pm} は二次方程式 $x^2 = (2 - \omega^2 \Delta t)x - 1$ の根:

$$\alpha_{\pm} = 1 - \frac{1}{2}\omega^2 \Delta t^2 \pm i\omega \Delta t \sqrt{1 - \omega^2 \Delta t^2} = 1 \pm i\omega \Delta t + O(\Delta t^2).$$

経路積分の計算：調和振動子

$M_0 = 1$, $M_1 = 2 - \omega^2 \Delta t$ より係数 C_1, C_2 を定めて,

$$M_n = \det M_N = \frac{\alpha_+^N - \alpha_-^N}{\alpha_+ - \alpha_-} = \frac{(1 + i\omega\Delta t + O(\Delta t^2))^N - (1 - i\omega\Delta t + O(\Delta t^2))^N}{2i\omega\Delta t(1 + O(\Delta t^2))},$$

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \Delta t \det M_N = \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{(1 + i\omega T/N + O(N^{-2}))^N - (1 - i\omega T/N + O(N^{-2}))^N}{2i\omega(1 + O(N^{-2}))}$$

$$= \frac{\sin \omega T}{\omega} \quad (T = t_F - t_I).$$

経路積分の計算：調和振動子

$M_0 = 1$, $M_1 = 2 - \omega^2 \Delta t$ より係数 C_1, C_2 を定めて,

$$M_n = \det M_N = \frac{\alpha_+^N - \alpha_-^N}{\alpha_+ - \alpha_-} = \frac{(1 + i\omega\Delta t + O(\Delta t^2))^N - (1 - i\omega\Delta t + O(\Delta t^2))^N}{2i\omega\Delta t(1 + O(\Delta t^2))},$$

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \Delta t \det M_N = \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{(1 + i\omega T/N + O(N^{-2}))^N - (1 - i\omega T/N + O(N^{-2}))^N}{2i\omega(1 + O(N^{-2}))}$$

$$= \frac{\sin \omega T}{\omega} \quad (T = t_F - t_I).$$

調和振動子に対する Green 関数

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \sqrt{\frac{m\omega}{2\pi i \hbar \sin \omega(t_F - t_I)}} \exp\left(\frac{i}{\hbar} S_{cl}(t_F, x_F | t_I, x_I)\right),$$

$$S_{cl}(t_F, x_F | t_I, x_I) := \frac{m\omega}{2 \sin \omega(t_F - t_I)} [(x_I^2 + x_F^2) \cos \omega(t_F - t_I) - 2x_I x_F] \quad (\text{古典力学的作用}).$$

目次

- ① はじめに
- ② 経路積分の解釈
- ③ 経路積分の計算
- ④ Green 関数の物理的意味**
- ⑤ まとめ
- ⑥ 補遺：作用関数の微分

Green 関数の物理的意味

Schrödinger 方程式の Green 関数 $\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I)$.

- 解の伝播の様子を与える.

$$\psi(t_F, x_F) = \int_{-\infty}^{\infty} dx_I \mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) \psi(t_I, x_I).$$

Green 関数の物理的意味

Schrödinger 方程式の Green 関数 $\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I)$.

- 解の伝播の様子を与える。

$$\psi(t_F, x_F) = \int_{-\infty}^{\infty} dx_I \mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) \psi(t_I, x_I).$$

- Hamiltonian \hat{H} の固有状態の情報を持っている。

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \sum_n \exp\left(-\frac{i}{\hbar}(t_F - t_I)E_n\right) \varphi_n(x_F) \varphi_n^*(x_I),$$

$E_n, \varphi_n(x) : \hat{H}$ の固有エネルギー, (規格化) 固有関数

$$\left(\hat{H}\varphi_n = E_n\varphi_n, \quad \hat{H} = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{\partial^2}{\partial x^2} + V(t, x) \right)$$

Green 関数の物理的意味

Schrödinger 方程式の Green 関数 $\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I)$.

- 解の伝播の様子を与える.
- Hamiltonian \hat{H} の固有状態の情報を持っている.

両者はなぜつながるか？

Green 演算子 (解の時間発展) : 形式的に

$$\hat{\mathcal{G}}(t_F | t_I) = \exp\left(-\frac{i}{\hbar}(t_F - t_I)\hat{H}\right).$$

\hat{H} の固有状態 $\{|n\rangle\}$ の完全性 $\sum_n |n\rangle\langle n| = 1$ より

$$\hat{\mathcal{G}}(t_F | t_I) = \sum_n \exp\left(-\frac{i}{\hbar}E_n(t_F - t_I)\right) |n\rangle\langle n| \quad (|n\rangle\langle n| : \text{状態 } n \text{ への射影}),$$

$$\mathcal{G}(t_F, x_F | t_I, x_I) = \langle x_F | \hat{\mathcal{G}}(t_F | t_I) | x_I \rangle = \sum_n \exp\left(-\frac{i}{\hbar}E_n(t_F - t_I)\right) \varphi_n(x_F) \varphi_n^*(x_I).$$

Green 関数の物理的意味

調和振動子について，Green 関数より固有エネルギー・固有関数を求める。
Green 関数．

$$\begin{aligned}\mathcal{G}(t, x, y) &:= \mathcal{G}(t, x|0, y) \\ &= \sqrt{\frac{m\omega}{2\pi i\hbar \sin \omega t}} \exp\left(\frac{i m\omega}{2\hbar \sin \omega t} [(x^2 + y^2) \cos \omega t - 2xy]\right).\end{aligned}$$

$$\mathcal{G}(t, x, y) = \sum_n e^{-(i/\hbar)tE_n} \varphi_n(x) \varphi_n^*(y), \quad \int_{-\infty}^{\infty} dx |\varphi_n(x)|^2 = 1 \quad (\text{規格化})$$

を用いて，

$$\sum_n e^{-(i/\hbar)tE_n} = \int_{-\infty}^{\infty} dx \mathcal{G}(t, x, x).$$

右辺に調和振動子に対する Green 関数を代入して計算してみる．

Green 関数の物理的意味

$$\sum_n e^{-(i/\hbar)tE_n} = \int_{-\infty}^{\infty} dx \mathcal{G}(t, x, x) = \sqrt{\frac{m\omega}{2\pi i \hbar \sin \omega t}} \int_{-\infty}^{\infty} dx \exp \left[\frac{im\omega}{\hbar \sin \omega t} (\cos \omega t - 1)x^2 \right],$$

右辺の積分を実行して,

$$\sum_n e^{-(i/\hbar)tE_n} = \frac{1}{2i \sin(\omega t/2)} = \frac{e^{-i\omega t/2}}{1 - e^{-i\omega t}} = \sum_{n=0}^{\infty} \exp \left[-i \left(n + \frac{1}{2} \right) \omega t \right].$$

$$\therefore E_n = \left(n + \frac{1}{2} \right) \hbar \omega \quad (n = 0, 1, 2, \dots).$$

調和振動子の固有エネルギーが得られた。

* 級数を収束させるために, $t \rightarrow t - i\epsilon$ ($0 < \epsilon \ll 1$) とする。

Green 関数の物理的意味

$$\begin{aligned}
 \mathcal{G}(t, x, y) &= \sqrt{\frac{m\omega}{2\pi i \hbar \sin \omega t}} \exp\left(\frac{i m \omega}{2 \hbar \sin \omega t} [(x^2 + y^2) \cos \omega t - 2xy]\right) \\
 &= \sqrt{\frac{m\omega}{\pi \hbar}} \exp\left[-\frac{m\omega^2}{2\hbar}(x^2 + y^2)\right] e^{-i\omega t/2} \\
 &\quad \times \left\{ 1 + \frac{2m\omega}{\hbar} e^{-i\omega t} + \left[\frac{1}{2} - \frac{m\omega}{\hbar}(x^2 + y^2) + 2\left(\frac{m\omega}{\hbar}\right)^2 x^2 y^2\right] e^{-2i\omega t} + \dots \right\}.
 \end{aligned}$$

これと

$$\mathcal{G}(t, x, y) = \sum_{n=0}^{\infty} e^{-i(n+1/2)\omega t} \varphi_n(x) \varphi_n^*(y)$$

とを比較して,

$$\varphi_0(x) = \left(\frac{m\omega}{\pi \hbar}\right)^{1/4} \exp\left(-\frac{m\omega^2}{2\hbar} x^2\right), \quad \varphi_1(x) = \sqrt{\frac{2m\omega}{\hbar}} x \varphi_0(x), \quad \varphi_2(x) = \frac{1}{\sqrt{2}} \left(2\frac{m\omega}{\hbar} x^2 - 1\right) \varphi_0(x), \quad \dots$$

調和振動子の固有関数が得られた.

Green 関数の物理的意味

閑話休題.

$$\sum_n e^{-(i/\hbar)tE_n} = \int_{-\infty}^{\infty} dx \mathcal{G}(t, x, x).$$

$$t = -i\hbar\beta,$$

$$\left(\beta = \frac{1}{k_B T}, \quad T : \text{絶対温度}, \quad k_B : \text{Boltzmann 定数} = 1.380\,649 \times 10^{-23} \text{JK}^{-1} \right)$$

を代入すると,

$$Z := \sum_n e^{-\beta E_n} = \int_{-\infty}^{\infty} dx \mathcal{G}(-i\hbar\beta, x, x) \quad \text{統計力学における分配関数.}$$

$\mathcal{G}(-i\hbar\tau, x, y)$: 拡散型方程式に対する Green 関数 (前回動画) .

Green 関数の物理的意味

閑話休題.

$$\sum_n e^{-(i/\hbar)tE_n} = \int_{-\infty}^{\infty} dx \mathcal{G}(t, x, x).$$

$$t = -i\hbar\beta,$$

$$\left(\beta = \frac{1}{k_B T}, \quad T : \text{絶対温度}, \quad k_B : \text{Boltzmann 定数} = 1.380\,649 \times 10^{-23} \text{JK}^{-1} \right)$$

を代入すると,

$$Z := \sum_n e^{-\beta E_n} = \int_{-\infty}^{\infty} dx \mathcal{G}(-i\hbar\beta, x, x) \quad \text{統計力学における分配関数.}$$

* 2019 年の国際単位系 (SI) の改定により, 上記の Boltzmann 定数の値は**確定値**となった.

(質量 (キログラム) の定義はキログラム原器を用いなくなった)

目次

- ① はじめに
- ② 経路積分の解釈
- ③ 経路積分の計算
- ④ Green 関数の物理的意味
- ⑤ **まとめ**
- ⑥ 補遺：作用関数の微分

まとめ

量子力学：Schrödinger 方程式の Green 関数に対する経路積分。

- 経路積分表示の解釈。
 - ▶ 始点・終点をつなぐすべての経路に沿う波動関数の和。
 - ▶ 一つの経路に沿う波動関数：微小区間の平面波をつなぐ。

$$\psi(\text{path}) = C \exp\left(\frac{i}{\hbar} S(\text{path})\right), \quad S : \text{作用}.$$

- ▶ 古典的極限 ($\hbar \rightarrow 0$)：古典力学的軌道の寄与のみ残る。
- 自由粒子，調和振動子に対して Green 関数の経路積分を具体的に計算した。
- Green 関数の物理的意味。
Hamiltonian の固有状態の情報を持っている。

目次

- ① はじめに
- ② 経路積分の解釈
- ③ 経路積分の計算
- ④ Green 関数の物理的意味
- ⑤ まとめ
- ⑥ 補遺：作用関数の微分

補遺：作用関数の微分

作用関数 $S(t_F, x_F)$ の定義

$$S(t_F, x_F) = \int_{t_I}^{t_F} dt L(t, x(t), \dot{x}(t)),$$

$x(t) : (t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ の実際の運動軌道.

このとき次が成り立つ.

$$\text{運動量} \quad p_F = \frac{\partial S(t_F, x_F)}{\partial x_F},$$

$$\text{エネルギー} \quad E_F = - \frac{\partial S(t_F, x_F)}{\partial t_F}.$$

補遺：作用関数の微分

$p_F = \frac{\partial S(t_F, x_F)}{\partial x_F}$ の証明.

- $x(t) : (t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ を結ぶ運動軌道.
- $x(t) + \delta x(t) : (t_I, x_I) \sim (t_F, x_F + \delta x_F)$ を結ぶ運動軌道.

(この両者の軌道は異なることに注意)

$$\begin{aligned}
 & S(t_F, x_F + \delta x_F) - S(t_F, x_F) \\
 &= S[x + \delta x] - S[x] \\
 &= \int_{t_I}^{t_F} dt \{L(t, (x + \delta x)(t), (\dot{x} + \delta \dot{x})(t)) - L(t, x(t), \dot{x}(t))\} \\
 &= \int_{t_I}^{t_F} dt \left\{ \delta x(t) \frac{\partial L}{\partial x} + \delta \dot{x}(t) \frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right\} \quad (\text{第 2 項に部分積分を施して}) \\
 &= \left[\delta x(t) \frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right]_{t=t_I}^{t_F} + \underbrace{\int_{t_I}^{t_F} dt \delta x(t) \left\{ \frac{\partial L}{\partial x} - \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right) \right\}}_0 \\
 &= \delta x_F p_F.
 \end{aligned}$$

補遺：作用関数の微分

$E_F = -\frac{\partial S(t_F, x_F)}{\partial t_F}$ の証明.

- $x(t) : (t_I, x_I) \sim (t_F, x_F)$ を結ぶ運動軌道.
- $x(t) + \delta x(t) : (t_I, x_I) \sim (t_F + \delta t_F, x_F)$ を結ぶ運動軌道.

$$\begin{aligned}
 & S(t_F + \delta t_F, x_F) - S(t_F, x_F) \\
 &= S[x + \delta x] - S[x] \\
 &= \int_{t_I}^{t_F + \delta t_F} dt L(t, (x + \delta x)(t), (\dot{x} + \delta \dot{x})(t)) - \int_{t_I}^{t_F} dt L(t, x(t), \dot{x}(t)) \\
 &= \int_{t_F}^{t_F + \delta t_F} dt L(t, (x + \delta x)(t), (\dot{x} + \delta \dot{x})(t)) + \int_{t_I}^{t_F} dt \left\{ \delta x(t) \frac{\partial L}{\partial x} + \delta \dot{x}(t) \frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right\} \\
 &= \delta t_F [L]_{t=t_F} + \left[\delta x(t) \frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right]_{t=t_I}^{t_F} + \int_{t_I}^{t_F} dt \delta x(t) \underbrace{\left\{ \frac{\partial L}{\partial x} - \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right) \right\}}_0 \\
 &= \delta t_F [L]_{t=t_F} + \delta x(t_F) p_F.
 \end{aligned}$$

補遺：作用関数の微分

$\delta x(t_F)$ を求めなければならない。 $(x + \delta x)(t_F + \delta t_F) = x_F$ より、

$$\underbrace{x(t_F)}_{x_F} + \delta t_F \dot{x}(t_F) + \delta x(t_F) = x_F,$$

$$\therefore \delta x(t_F) = -\delta t_F \dot{x}(t_F).$$

これを前頁の式に代入して、

$$S(t_F + \delta t_F, x_F) - S(t_F, x_F) = \delta t_F [L - p\dot{x}]_{t=t_F} = -\delta t_F E_F.$$